

伊 藤 めぐみ*

いわゆる「サッカー戦争」(1969年)をめぐる ーホンジュラス・記憶の政治学の試みー



はじめに

まず「サッカー戦争」という言葉それ自体から出発したい。中米の国ホンジュラスとエルサルバドルというあまり知られていない国で起きた戦争に関心の目が向けられることがあるのは、この奇抜な名前故ということもあるのかもしれない。マスメディアは、1969年に起きたこの戦争をサッカーワールドカップ予選試合の勝敗が原因であるとし、この名を付したが「サッカー戦争」という用語を用いた瞬間、より本源的な問題を覆い隠す言語暴力に加担することになりはしないか。数年前の1年間にわたる長期滞在に続き、2006年夏、私はホンジュラスに1ヶ月滞在し、この1969年に起きた戦争についての聞き取りを行った。「サッカー戦争」という名前が感じさせるイメージとは程遠い、戦争の記憶にめぐりあった。

本論は戦争の当時、何が行われたかを明らかにするものではない。私がホンジュラスで出会った何人かのホンジュラスの人たちが、社会をどのように見て、過去の出来事をどのように振り返り、私にどのように語ってくれたかを記録したものである。まだ相手の話を十分に聞くことが出来ておらず、人の記憶の仕方も変化するため、この試みは始まったばかりである。この「記憶の政治学」として行った聞き取りに力を貸してくれたたくさんの人たちの顔をひとりひとり思い浮かべながら、ここに中間報告をまとめた。

1. 研究課題と方法

本論に入る前に1969年の戦争について知るために用いた方法、何に関心を向けてこれから述べていくかをあらかじめ明らかにしておきたい。以下、「サッカー戦争」の名称は使わず、「1969年の戦争」とする。

方法についてであるが、主に「聞き取り」という形をとった。私はホンジュラスには2002年から約1年間滞在していたことがあり、今回の訪問では以前からの知人の協力を得て幾人かの話を聞くことができた。対象はホンジュラス人のみでエルサルバドル人の話は聞くことが出来ない。場所は、コパン県(Copán)のサンタ・ロサ・デ・コパン(Santa Rosa de Copán、以下サンタ・ロサ)という現在人口4万人、戦争当時は「眠ったような寒村」(リシャルト・カプチンスキ、Ryszard Kapuscinski, 1993年、p.185)で、空爆にもあっている町を中心に行なった。今回の目標は違った立場の人に話を聞いて、表面的ではあったとしてもできるだけ幅広いイメージを掴むことであった。そのため大半の聞き取りが1回、あるいは2回と少なく、初対面の人も多かったため、相手が十分信頼して話せる状況をつくることができず、また相手が話そうとしていたところまでこちらが理解することが困難であったと考える。今回で完結せずに、継続していくことが当初からの前提である。また聞き取りのうちのいくつかは、ホンジュラス人の友

*中部大学国際関係学部国際文化学科学学生

人が一緒に話を聞き、質問をしてくれるなどの協力が得られたことも付け加えておく。文字化された資料についてもいくつか手に入れることができた。しかしサンタ・ロサにはそれほど多くの文献、新聞の保存がなかったため、資

料から接近するのであれば、首都テグシガルパ（Tegucigalpa）か第二の都市サン・ペドロ・スラ（San Pedro Sula）に行く必要がある。反対にサンタ・ロサの地域的な利点として、地元の退役兵の会の人たちが中心となって保存した資料が



出典：Retired Expat

(<http://www.retiredexpat.com/retirement-locations/map-honduras.php>)

あるため、他では入手しづらい外国の報道記事や当時の写真、負傷者や死者の名前も知ることができる。

では次に1969年の戦争の何に関心を向けてこれから述べていくのかを示すことにする。これは私がどのような質問をしようと努めたのかということと、相手がどのようなことを積極的に話してくれたのかを意味する。総合すると、戦争が起きた時の個人的な状況、当時の政府あるいは政治に対する評価、戦争の原因についての当時と現在の理解、エルサルバドル人への意識、

アメリカの覇権と現在のラテンアメリカの左翼化とに対する評価、ホンジュラスに必要なだと考えるものなどである。

はじめにも述べたがこれは1969年の戦争の事実を明らかにするものではない。実際に起きたとされていることも、虚偽だとされていることも関係なく¹⁾、どのように他者である私に語ってくれるのかを描こうとしたものである。私が出会った人たちもわずかで、一地方都市に限定され、全体の意見を代表するものでもない。さらに言えば、全体像といってもそれぞれの人が語ってくれることは多様で何をもって全体とい

えるのかははっきりしていない。また私が言葉を理解し損なうという問題も無視することはできず、ある一個人の歴史を表すことにも限界がある。不十分であることは承知の上だが、それをあえて認めることが話をしてくれた相手への敬意だと考えている。

2. 戦争の概要と研究者による原因に対する見方

「サッカー戦争」……この政治的な命名をまづもって問い直したい。

1969年、当時軍事政権だった中米の2ヶ国、ホンジュラスとエルサルバドルは戦争を行なった。国際報道はこの戦争がサッカー・ワールド・カップの出場権をめぐる試合の勝敗が原因であるとして「サッカー戦争」と名付けた。しかし実際は、両国はそれ以前からすでに問題を抱えていた。このことについては後で述べるが、はじめに出来事の経過だけを示して起きたい。6月8日に第1試合がホンジュラスで行なわれ、ホンジュラスが勝利する。試合前夜、ホンジュラスのサポーターはエルサルバドル選手の宿泊するホテルの前で騒ぎ彼らの安眠を妨げたという。これらは「ラテンアメリカでは広く一般的に実践されている慣わし」(リシャルト・カブチンスキ、1993年、p.170)だそう。6月15日、エルサルバドルで第2試合が行われる。今度はエルサルバドル人によるホンジュラス選手への妨害が行われるが、それは通常以上のものでホンジュラスから来たサポーターは暴行を受け、死者も出ている。第3試合はメキシコで行なわれ、エルサルバドルが勝利した。ベセッラ(Longino Becerra)によると、6月25日に、両国は互いの国を非難する報告を米州人権委員会(la Comisión Interamericana de Derechos Humanos)に伝えた。それぞれの報告の内容は、

エルサルバドル側はホンジュラス国内のエルサルバドル人が第2試合のあと暴行を受けるなど人権侵害を受けたというもの、ホンジュラス側はエルサルバドルで同試合中ホンジュラス人サポーターの人権が冒涇されたというものだった。6月26日(27日)、エルサルバドルはホンジュラスとの外交関係を断ち切る。戦争が始まる前に国境付近ではすでに軍事衝突が起きており、ベセッラは、6月31日にエルサルバドル軍がヌエバ・オコテペケ(Nueva Ocotepeque)とエル・ポイ(El Poy)を攻撃したと記し(Longino Becerra, 1982, p.189)、7月4日の『朝日新聞』夕刊にはエルサルバドル発の記事としてホンジュラス空軍が3日にエルサルバドル内の国境警備所を爆撃し砲撃戦になったと伝えている(田中高、2004年p.132)。7月14日、エルサルバドルがホンジュラスの数都市を攻撃したことで戦争が始まる。国境付近では地上戦も行なわれる。米州機構(OAS)が翌日には介入するが、交戦は続き、7月18日になって戦闘が停止する。それまで多くのエルサルバドル人がホンジュラスに住んでいたが戦争後、エルサルバドルに帰ることになった。死者は資料によって異なるも2,000人から6,000人とされている。

では戦争の原因は何だったのか。ここではホンジュラス国外の研究に絞って述べていくことにする。論者によって表現の仕方は違うが共通しているのは、次の3つの点である。まず「1821年に独立して以来、ホンジュラスとエルサルバドルの一部国境線が不確定であったこと。西半球でも有数の人口稠密国であるエルサルバドルから、比較的土地面積にゆとりのあるホンジュラスに、約50万人とも推定される合法、非合法の移民が居住し摩擦が起きていたこと。さらには中米共同市場で輸入代替工業化に成功を収め

つつあったエルサルバドルと、農業への依存度が高いままのホンジュラスとの間に、相当の貿易収支の不均衡が生じ、中米共同市場発足以降、ホンジュラスの域内国との貿易赤字の累積額は8,540万ドルに達していた」(田中、2004年、p.133)ことだ。

おそらく世界的にもっともこの戦争について読まれている『サッカー戦争』で、ポーランド人ジャーナリストのカプチンスキは、この中の移民の問題に主眼を置いて説明している。彼によると、エルサルバドルは中米の中でも領土が狭く一方で人口が多い。さらに寡頭制で少数の人間が土地を握っているため貧しい農民の一部が仕事と土地を求めてホンジュラスに移住するようになった。この移住は不法だったが、ホンジュラス政府は長い間それを不問にしてきた。しかしホンジュラス政府自体も寡頭制だったため1960年代になるとホンジュラスの農民の間の不満がだんだんと高まり政府は農地改革を決定するに至る。政府はアメリカ政府よりだったためアメリカ企業であるユナイテッド・フルーツ社の土地は分割せず、エルサルバドル人を排除し彼らがいる土地を分割しようとした。エルサルバドル政府にとっては、移住していたエルサルバドル人が帰国するということは、国内での雇用口あるいは土地がさらに必要になり、それらを求めて国民の不満が高まり、農民革命が起きる可能性が高まるということを意味する。エルサルバドル政府にとっては都合が悪くなる。このような2ヶ国間の緊張状態の下、両国の新聞が誹謗中傷し合い、大量殺戮、店の焼き討ちが行なわれ、関係が悪化したことが背景となって戦争が起きたとカプチンスキは説明する(カプチンスキ、1993年、pp.198-199)。

また狐崎知己の表現に従えば、「この戦争の

根本的原因は両国の成長モデルと農地問題を主因とする国内矛盾にあり、国際紛争を引き起こすことによって革命の形で矛盾が噴出することを回避しようとした寡頭支配層の政策が直接の原因」であり、狐崎はこのような研究を行なったダーハム(William Durham)やアンダーソン(Thomas Anderson)の見解は広く了解されているとしている(狐崎、1990年、p.250)。

一方、モリス(James A. Morris)は同様の3つの理由を述べつつ、ホンジュラス国内の不満が高まったこととナショナリズムの力が戦争を支えたことを強調している。1969年にホンジュラスの移民法の期限が切れ、それが更新されないままという状態になるが、この時、農民運動は土地を分配するように、労働組合は外国人の雇用を制限するようという要求を行なった。また中米共同市場(MCCA)の開始でホンジュラスの収入が減少したことから商業界、労働運動、農民運動の指導者たちが活動を活発化させて政府への圧力を強めていた。このような勢力の動きが両国の対立を促進することになったのである。モリスは戦争が始まる前にすでにエルサルバドルに帰国する在ホンジュラスのエルサルバドル人がいたと指摘している。またモリスは、戦争が始まると、ホンジュラス国内ではとりわけ農村部を中心に国民が戦争を支援したという特徴も挙げている。(モリス、1984年、pp.110-113)以上の研究者によって述べられていることをまとめれば領土、移民、経済の問題が根本にあり、国民の不満から問題が深刻化したというのが戦争の原因だ²⁾。

この戦争の結果はどうなったのか。両国の関係は10年以上緊張状態が続くことになった。モリスによると問題となった国境付近の土地は軍事的空白地域として位置づけられ、その結

果、エルサルバドルのゲリラの聖域として使用されることになる。しかしニカラグアで革命が起り、エルサルバドルのゲリラが活発化し内戦が激化したことで、共産化を恐れる両国政府の関係が急速に回復し、1980年に和平協定が結ばれることになったのだ。これによりこの地域を2カ国で管理することが決められ、再びこの地域が軍事化することになる。ホンジュラスのいわゆる軍部「強硬派」とアメリカ政府は、エルサルバドルの内戦がホンジュラスに波及することを恐れていたためこの協定は都合のよいものだったとモリスは述べている(モリス、1984年、pp.112-113)。

狐崎も、カーター政権にはホンジュラスを反共の砦として利用し、両国の国交を復興させることで、この地域にエルサルバドル軍が進行することを可能にしたいという思惑があったという点を指摘している(狐崎、1990年p.205)³⁾。

3. 聞き取り対象者のプロフィール

ここからは私の聞きとりの内容を中心に考察していくことにする。この調査を行った際、聞きとりに応えてくれた人の許可を得て録音し、何度も聴きなおすことで厳密を期した。調査はすべてスペイン語で直接行ったものである。

まず聞き取りに答えてくれた人たちのプロフィールを記しておく。ここで期す「現在」は私の調査した2006年8月～9月の時点を目指す。

1. ウゴ・アントニオ・タボラ・セロン (Hugo Antonio Tábor Zerón) さん
戦争当時は17歳、現在54歳。金物店を営む。大学はメキシコで歯科を学ぶ。日本に滞在経験あり。市長を務めたこともある。

2. ホルヘ・ミランダ (Jorge Miranda) さん
現在、26歳。青少年、貧困、住居の問題に携わる仕事をする傍ら、大学で社会科学を学んでいる。モルモン教の宣教師として2年間グアテマラに滞在した。そこで虐殺の聞き取りもしている。

3. ホルヘさんのお祖母さん
ホルヘ・ミランダさんのお祖母さん。当時、家族でお菓子等をつくって生計を立てていた。

4. リーチョ (Licho) さん
戦争当時は30歳代、現在70歳くらい。戦闘があったオコテペケで農業を営んでいた。一時、捕虜になる。戦争後は避難先であったサンタ・ロサで生活している。

5. グスタボ・ロランド・モヤ・チャベス (Gustavo Rolando Moya Chavez) さん
戦争当時は20歳で、ホンジュラスの南部において10部隊の軍曹を務めた。現在は退役兵の会の全国副会長兼この地域の会長である。武器を売る店を営んでいる。

6. セッサル・アウグスト・ラミレス・トロ (Cesar Augusto Ramirez Toro) さん
戦争当時は20歳で、ラジオの報道記者として戦闘に参加した。

7. A 神父 (Padre. A)
戦争当時は国境付近の村、レンピーラ (Lempira) に住んでいた。貧しい人たちの生活改善のために働くなどしており、信頼を寄せる人は多い。

8. エスペランサ・エナモラード (Esperanza Enamorado) さん

戦争当時は19歳、学校を卒業して教師となった。貧しい子どもたちが多く通う幼稚園で働き、現在は退職している。

9. エスペランサさんのお連れ合い
医者。

10. 市場の女性

戦争当時は30歳代。子ども2人を抱えていた。現在は市場で野菜を売る仕事をしている。

11. ロサ・アメリア・モラーレス (Rosa Amelia Morales) さん⁴⁾

4. 戦争の原因

はじめに今回、話をしてくれた人たちの説明する戦争の原因について述べておきたい。大方の意見はエルサルバドルがホンジュラスの領土を奪いたかったからだというものだ。彼らは同時にサッカーの試合が原因ではないことも強調する。逆に言えば、サッカーが原因だと考えている人も多いことを示している。また原因そのものを説明することに力を入れ、ホンジュラスに非はないことを力説する人も少なくない。

とはいうものの、その戦争が始まった当時に話を戻せば、リーチョさん、エスペランサさん、市場の女性が述べているようにその原因を多くの人が知らず、その後、サッカーが原因だと言われるようになったということにも注目したい。ここで疑問が生まれる。現在、サッカーが原因だと言われているのは、エルサルバドルが戦争を起こすための「口実」として利用したと大半のホンジュラス人は説明する。具体的には、エルサルバドルが第2試合でホンジュラスのサ

ポーターを襲撃して挑発しつつ、エルサルバドルが戦争を始めたという内容である。しかしなぜ、その当時、ホンジュラス国内でもサッカーが原因という説明が広まったのか。それがアメリカ発の報道、あるいはエルサルバドルの口実ならば、言論統制を行なうホンジュラスの軍事政権がそれをホンジュラス国内で広める必要はどこにあったのだろうか。モヤさんはホンジュラスの報道も「サッカー戦争」と伝えたと言っている。なぜ問題を単純化して、エルサルバドルが当時言っていたように、サッカーの試合で負けたからと説明したかの理由は示されていない。初めからホンジュラス政府はエルサルバドルが領土を奪おうとしていたと非難することもできたはずである。

これへの説明として、ホルヘさんが述べていたように当時の政権は国民が政治に関心を持つことを望まなかったため、サッカーという口実を用いたのかもしれないと考えることはできる。モヤさんは政府が寡頭制であったことを強調していた。つまり経済問題だということになれば、都市部で広がる労働・農民運動に拍車がかかり政府への圧力が高まる可能性があることを意味する。だがエルサルバドル側が用いた理由ではホンジュラス側に非があることになってしまう。ホンジュラス側の説明がどのようなものだったのかをはっきり説明する人にはまだ出会っていないが、第1試合のエルサルバドルの敗北からエルサルバドルが攻撃的になったという説明も可能である。あるいは、当初からはっきりとした説明はなかったのかもしれない。

原因はサッカーの試合ではないという人たちにもいくつかの主張の違いがある。多数派の人たちは、問題は「エルサルバドルのオリガーキー(寡頭制)」⁵⁾がホンジュラスの土地を奪って大西

洋に面した港をほしがっていたからだ」と説明する。しかしA神父の説明は、問題は「オリガーキー」であるというニュアンスが強い。話している内容はほぼ同じだが、オリガーキーの行為を問題と考えるのか、それともその存在を問題と考えるのかの違いがある。オリガーキーを問題とするのならば、それはホンジュラスにも当てはまる。

戦争の原因についてモヤさんのように両国の農民の経済状況から必要に迫られて行なわれたと考える人もいる。つまり生活改善を求める農民の要求に答える形で始まったのであり、良い悪いという問題ではなく、避けられないこと、必然だったという解釈だ。またホルヘさんのように外国の文献で述べられているような経済と領土の問題と述べる人もいる。

ホンジュラスで出版されている著作ではどのような記述がなされているのか。どれほどの一般性があるのかは証明できないが、ベセッラも *evolución histórica de Honduras* では、2章で述べたのと同様の3つの理由を書いている。しかしその説明はホンジュラス側を正当化する意味が込められている。まず1つとして、「中米共同市場における両国のオリガーキーによって生まれた矛盾」を挙げている。そして中米共同市場がホンジュラスに不利に働いたこと、ホンジュラスがエルサルバドルのための市場となったこと、ホンジュラスがこの協定を問題にし、脱退することを提起すると、エルサルバドルがそれを止めさせるために戦争を含めてあらゆる手段をとったことなど不当な扱いを受けていたと説明されている。また2つとして、移民に関しては、この移民の増加は「エルサルバドル政府が1932年にエルサルバドルの農民の大虐殺を行なった時からとりわけ増加した」と述べている。

さらにエルサルバドル政府がプロパガンダを行なって反ホンジュラス感情を爆発させたとしてエルサルバドル政府の行動を批判的に記している。最後に挙げている国境問題に関しては、エルサルバドルのオリガーキーは常に領土拡大の野心を持ち、挑発的な態度をとっていたこと、1918年、両国で話し合った国境画定の協定をエルサルバドルの国会は承認しなかったことが指摘されている。またここでのもう1つの批判は、エルサルバドル国内で土地を求める声が上がっていたが、オリガーキー自身が農民の土地を奪っていたという皮肉な状態だったことだ。またこの3つの説明に加えて、サッカーの試合については第1試合でホンジュラスがいかに礼儀正しく行動したかが強調されている。

戦争が起きた当時も今も何か1つの要因にだけ目を向けていると見落とすものがある。それは経済問題などの側面にも、サッカーの試合という側面にも両方に言えることだ。サッカーの試合が原因などというといかにもプロパガンダ的に強調されているようだが、試合が果たした役割も見逃してはならない。政治がサッカーを利用し、また人々の側も試合の結果に即座に反応したことは考慮すべきだ。今もサッカーの試合が原因として記憶され、語られてもいる。虚構の部分がいくらかあるものも、語られることでまるで事実であるかのような働きをし、別の何かに働きかけ新たな何かを生む。

5. 当時のホンジュラス政府への評価

では当時のホンジュラス政府についてはどう評価していたのか。1969年当時、政治意識が高かったかどうかをあまり聞き出すことはできなかったが、現在から振り返って見れば当時の政権は腐敗していたと評価する人は多い。しか

し、質問が、ホンジュラス政府に好意を抱いていたか、ホンジュラス政府にも問題はなかったか、戦争に反対する人はいたかというものになると、エスペランサさん、トロさんはそのような質問自体が的外れであるとの反応を示し、戦争に賛成も反対もなくエルサルバドルが攻撃してきたのだから、ホンジュラスは反撃するしかないとの答えだった。そして当時の政府を批判する一方で自分たちは政府を支援し、連帯していたということも述べている。しかしながら戦争は望まず、人々が死んでいくのは悲しいことだと考えるとも話す。あるいはモヤさんのように政府は腐敗していたが、一般の兵士と国民の間は団結していたと解釈する人もいる。他方で市場の女性やリーチョさんは当時の政権が誰であったかは覚えていないと言う。リーチョさんはオコテペケから避難のためサンタ・ロサに連れてこられたが、政府の援助がほとんどなかったと述べてはいる。しかし彼の言葉は、批判というよりも不満を述べているという語り方である。また、リーチョさんはまわりの人との関係についても、他の人が述べたような国家的な危機に対する国民としての連帯というよりも、いきなり狂い始めた生活を支えようとしてくれた知人、親類の援助という視点で話をしてくれた。

6. 当時と現在の軍隊への評価

では、軍隊についてはどのような考えをもっているのか。1969年は政府自体が軍人から成り立つ軍事政権だったが、話を聞いていると、彼らが軍隊を1つの組織としてみているのではなく、指導部と一般兵という2つの別の部分を持つものとしてみていることがわかる。まず軍隊の内部にいる人たちの評価についてであるが、元軍人であるモヤさんと元従軍記者であるトロ

さんは、指導部に関しては腐敗していたと批判し、一般兵が関係する領域に関しては農民を教育し、援助してくれたとして感謝の念を抱いている。

現在、退役兵の会が存在するが、2ヶ月に1回集まり、また社会奉仕活動もしているそうである。兵士としての国家、国民への責任感が別の形で現れていると考えられる。また戦争の話はあまりしないそうだが、彼らは雑誌を発行しており、戦争の記録、死んだ兵士を称える文章、中には軍備拡大や戦争に批判的な立場からの回顧文など様々な視点から編集されている。またモヤさんによると人々が戦争のことをだんだん忘れかけているのに危機感を抱き、3年前から資料集めを行なっているそうだ。カプチンスキは、「戦争とは死との絶えざる親交関係を作り出し、その経験は記憶の奥深くに沈み込む。あとになって年を取ると、男はまるで戦前の思い出が歳月と共に伸びてきたように、まるでその人生すべてをタコツボの中で過ごしたように、戦争の記憶にいつそう立ちもどるようになる」(カプチンスキ、1993年、p.195)と述べているが、彼らの書いたものからもそのような印象を受ける。

またトロさんは、自分を左翼だと名乗っていたが、規模はともかく軍内部にもそのような考えをする人がいたのではないかと推測することもあるだろう。徴兵されるのは農民だけであり、貧しい生活をしてきた彼らが共産主義的な考えに好感をもつ可能性はあり得る。その後のエルサルバドルの歴史でも軍内部で左翼勢力と別の勢力が衝突することもあった。

では一般市民にとって軍隊はどのような存在だろうか。現在は、上層部はともかく、軍隊の存在そのものは国内の治安維持などを担う必要

な存在であると考えられている。当時の軍への評価がどのようなもので、腐敗という問題がどれほど知られていたかはわからないが、今現時点からは軍は腐敗していたとみなしている。またA神父は、エルサルバドルの攻撃は不意討ちだとされているが実際は、軍人は攻撃の可能性を知っており、備えることが出来たにもかかわらずそうしなかったとして、軍は積極的に行動すべきだったと批判している。このことはロサさんが行なった元空軍兵士へのインタビューでも話されていることである。また軍と汚職との関係であるが、ウゴさんは、ロサさんの行なった退役兵へのインタビューに協力しているが、彼女が退役兵の中には当時の軍の秘密を知りつつも今も話したがる人もいたと話していたことを教えてくれた。トロさんも聞き取り中に自分が話すと問題が起きるといって回答を避けることもあった。ウゴさん、トロさん、A神父はサンタ・ロサで兵士の数を水増しして給料を着服した出来事があったと話している。

このように軍の腐敗に気づいたり、批判したりする一方で、同じ人が軍を賞賛することもある。エスペランサさん、ウゴさん、ロサさんらは当時の空軍は強かったと誇りを持って話す。またウゴさんは下級の兵士たちは謙虚で貧しい人たちだと肯定的に評価している。ウゴさんは今の軍人は臆病であるために治安も悪く、犯罪が増加して国がしっかりしていないと考えている。ウゴさんはアルバレス (Alvarez) という軍人がホンジュラス史の中で一番酷い弾圧を行ったと述べるが、今では治安の悪化からアルバレスが10人いたほうがよいと考える人が増えていると言ひ、ウゴさん自身もそれに賛成すると述べていた。

7. ナショナリズム

ホンジュラスの人と話しているとナショナリスト的な要素を感じることが多い。そしてそのナショナリスト的な要素は重なり合う部分も多いが2つに分けることができると考える。

1つは国民が連帯していることや軍や国家など集団としての優位性について述べるものである。1969年の戦争の話をしている中でも、ウゴさん、エスペランサさん、モヤさん、トロさん、ロサさんは、エルサルバドルが攻撃を開始したのでありホンジュラスに非がないこと、空軍が優秀だったこと、国民が連帯していたということを強調する。例えば国民の連帯に関しては、エスペランサさんは避難先でも見知らぬ人が住居を提供することがあったと述べている。

別の1つは集団のあり方については問題にせず、その中にいる個人について述べたものである。政府に批判的なA神父も、ホンジュラス人は環境が能力を押さえつけているだけで本当は素晴らしい可能性を持つと繰り返している。そしてたとえ話としてイタリアに移民した1人のホンジュラス人女性を例に挙げ、彼女が命と引き換えに海で溺れた女の子を救い、イタリア政府から感謝され、正規の書類のない在イタリア・ホンジュラス移民もイタリア人と同じ権利を獲得できるようになったという出来事を話してくれた。このような彼女1人の例からホンジュラス人全体の能力に話を広げ、ホンジュラス人の可能性について主張していた。またベセッラは、人々が積極的に戦争に協力することを願ったにもかかわらず、武器や地図がなくインフラが整わず、また識字教育も受けることができていないままという政府の怠慢を問題にし、せっかくの勝利の「機会」を失ったとしている。これは国民個人のナショナルな力を活かすことができない

かった、と読むことも出来るだろう。(Logino Becerra, 1982, p. 193)

しかしこの2つのいずれの場合も、国民の連帯、協力という言葉を使っているが、その瞬間にどれほどの人が「国家」というものを意識していたかは分からない。戦争でナショナリズムが高まることは大いにありうるが、目の前の状況にお互い助け合ったという意味の協力や連帯もあったのではないか。

次に戦争の原因の説明の仕方とナショナリズムの関係について2つ取り上げたい。まずモヤさんの話であるが、モヤさんは、戦争は必然として起きたと話している。その当時の政府の判断を批判することなく説明しようとしている。彼は政府の腐敗はホンジュラスにとって大きな問題だと強調はするが、この時の隣国への外交上の対応や判断については批判していない。そして戦争の原因が、ホンジュラス側がホンジュラス国内で働いていたエルサルバドル人を解雇したことだという見方は否定し、両国の経済状況の問題だとする。このように当時の状況が戦争を回避にしたのであり、善悪の区別をすることはできないという説明の仕方はどこか日本の大東亜戦争肯定論者のそれと似ている部分がある。また国家の機能に批判的な視野を持つA神父も、エルサルバドル政府がホンジュラスの農地改革法を問題にしたことに関しては、この法律はホンジュラス人のためのものであるとしてホンジュラス側を擁護している。

さらには、ホンジュラス側が説明するエルサルバドルの口実の内容に偏りがあることも特徴の1つだ。サッカーが原因だというのはエルサルバドルの口実だったと説明するが、その口実の詳しい内容、例えばエルサルバドルが第2試合でホンジュラスのサポーターが襲撃され

たあと、ホンジュラス側でホンジュラスに住んでいたエルサルバドル人が攻撃を受けていたとされていること、サッカーの予選で不利な状況にあったことをあえていう人はいない。いくらそれがエルサルバドルの口実だと考えていたとしても、自国にマイナスとなるイメージについては言及を控えるという傾向ではないかと考える。ロサさんはホンジュラス人の襲撃について記述をしているがそれは彼女が文献を参照しながら自叙伝を書いたことが理由かもしれない。またナショナリズムとは別の理由として、都市とは違ってサンタ・ロサではそのようなことがあまり行なわれなかったのかもれない。

話を聞いているかぎりでは、印象として、都市部のある程度教育を受けた人に排他的ではないナショナリスト的な要素があるように思う。これはメディアの影響や外国と比較する機会があることが原因ではないかと考える。またホンジュラスなどいわゆる「発展途上国」は大国の力を常に受けているため、そのような影響を受けつつも、自分たちの立場を崩さないようにあえてホンジュラスというナショナルなものを強調する必要が生まれるからであるとも考えられる。国内的には政府を批判していることから、国際的な関係でナショナリスト的な要素が発揮されるのではないか。リーチョさんはオコテペケという地方の出身であるが、彼にナショナリスト的な要素をあまり感じなかったのは、国境近くに住みエルサルバドル人との日常的な交流があり、また政府の拘束力も都市部のようには及ばないからではないだろうか。積極的に政治に関わる人が政府批判者にもナショナリストにもなりうる。

ナショナルな力以外に神の力を信じる人も多い。ロサさんは、ホンジュラス空軍が国民を守

り、活躍できたのは神がホンジュラスを守ってくれていたからだと書いている。トロさんは、自分は報道記者であるということと同時に神の言葉の説教師だと強調することで自分の話す内容に説得力を持たせようとしていた。キリスト教の強いこの国で祈ることの持つ意味も大きい。また教会の祭壇に国旗が掲げられているなどナショナルな力と宗教の力が関係しあうこともあるのではないかと考えられる。

8. 国民感情、大都市と地方都市と農村

これまでいくつかのテーマで論じてきたが、ナショナリスト的な要素に限らず、戦争の原因の説明、政府、軍への評価の違いが、所得の違い、生活環境の違い、教育との関係、特にそれらと重なる大都市、地方都市、農村の位置関係と関連している可能性がある。

例えばモリスは国民感情の悪化で緊張関係を招き戦争を引き起こしたとするが、首都から遠いサンタ・ロサは国民感情の悪化などという以前にエルサルバドルとの間が緊張していたことを知らない人もいた。情報や人が集まり、運動も活発になりやすい大都市との違いではないか。カプチンスキの記録によると、首都テグシガルパでは爆撃の翌日、壁にエルサルバドルを中傷する落書きが書かれていた(カプチンスキ、1993年、p.179)。ホンジュラス第二の都市に住むロサさんも戦争前から両国間の緊張した雰囲気を感じ取っていた(Morales, 2006, pp.55-56)。

また農村の人たちは軍に協力したとモリスやモヤさんは述べているが、どの範囲でそのような協力があったかは不明である。推測の域だが、サンタ・ロサのような国境からはある程度距離はあるが比較的近く、また当時、農業で生活を立てる人が多かった地域では、軍隊を支援

したのではないか。エスペランサさんは他の教師と兵士のための食事を大量に作ったと話している。また夫が兵士だったという女性は食べ物を提供したとも言っている。農民が兵士として徴用されるため、自分の家族の誰かが兵士として前線へ向かったことが動機の一つになる。また戦場からはある程度距離があることで自分たちの生活を保つことはできるが、捕虜が町に連れてこられ、兵士がそこから出発するという状態を目の前にするため協力しようという気持ちを持つようになったのかもしれない。

一方でリーチョさんの住むような国境付近の農村では協力という以前に、自分の命を守ることとで精一杯だったと考えられる。彼は、捕虜となり、拷問や殺害の現場を見ながら隙をみて逃げ、12日後に家族と再会した。以前の家はエルサルバドルの兵士、市民の略奪に合い、すべて奪われ、自分の人生を一からサンタ・ロサで始めなければならなかったと話してくれた。ロサさんやホルヘさんは、国境付近の村の人たちは突然、武器、制服、あるいは何も持たないまま軍に同行させられたという話を聞いている。またカプチンスキは、前線の兵隊になぜエルサルバドルと戦っているかを尋ねたところ、自分たちは知らない、それは政府の問題だと答え、そのようなことに疑問を持つと当局の耳に入り、あとで問題を背負い込むことになるかと答えたと言っている(カプチンスキ、1993年、pp.195-196)。戦争の後、国境の近くの村では、戦争前のように自由な行き来ができなくなったため生活しづらくなったということからも、ナショナリスト的な要素が高まるとは考えづらい。

このように一言に国民感情と言っても、大都市、地方都市あるいは農村、国境付近の農村ではその意識は違う。さらにそれぞれの場所でも

それぞれの生活環境によって反応も変わってくるだろう。都市の方が、教育に触れる機会があって正しい判断がしやすいと考えがちだが、情報に触れる機会が多いとプロパガンダの犠牲になりやすいのかもしれない。エルサルバドル批判をする論調に反応しやすくなると言える。

9. 「エルサルバドル」への意識

以上のように、場所などによって温度差はかなりあるものの全体としてナショナリスト的な雰囲気が認められるが、他国、例えば「エルサルバドル」に対する意識はいかなるものか。サンタ・ロサでは当時、ホンジュラスに住んでいたエルサルバドルの人たちに対しては悪い感情を抱いていなかったと答える人が多かった。ウゴさんはエルサルバドルの人たちも自分たち同様、当時の政府を嫌っていたと答えている。エスペランサさんも戦争の後、交流が断ち切られたが、今では時間が経ってエルサルバドル人とも仲良くやっていると答える。リーチョさんはエルサルバドル人も軍隊に使われ戦争の犠牲者であるという。基本的にはこの返答を受け止めつつ、注意して吟味したい。

当時の様子はというと、サンタ・ロサでもデマが広がりホンジュラスに住むエルサルバドル人がホンジュラスの情報を流すなどと言われ、彼らは一箇所に集められるなどした。政府が流した情報であつたらしいが、それを受け入れる土壤がある程度できていたとも考えられる。またホンジュラス人はエルサルバドル人を働き者であるという。ここには肯定的な評価もあるが、同時に、働き者イコールお金持ち、自分たちよりも多く稼いでいるという意味もある。ウゴさんはホンジュラス内の大型ショッピングセンターのいくつかはエルサルバドル人が所有者

であると話してくれた。お金持ちである人たちに対してはあまりいい感情を持っていないことが多い。

比較のために「中国」を例にする。中米では中国人が商売を営んでいることが多いが、ホンジュラス人よりも多くを稼いでいるという理由でわかりやすい形で差別的にみなす人もいる。それは私が日本から来たということもあって、同じアジアの日本と中国を区別する意味も込めてあえて私に言っているという側面も考慮する必要もある。そのような限定付きではあるが、「お金持ち」への反感があるとすると、「中国」と「エルサルバドル」への対応を比較すれば、「エルサルバドル」に対してはあからさまに悪く言っているのは聞いたことはない。また1969年の戦争で、サンタ・ロサには3つの爆弾が落とされたが、いずれも人の少ないところに落下し、どれも爆発しなかった。その理由は何であるかと尋ねると、エスペランサさんやホルヘさんなどは、エルサルバドル人もホンジュラス人を殺したくなかったからかもしれないと好意的に評価していた。

全体として今では反エルサルバドルの感情は感じられない。しかし他者である私に、エルサルバドル人に差別的な行動が取られたことをすぐに話してくれるとは限らない。また先ほど述べたように都市部では違った反応があったことも考慮しておきたい。

ここで少しエルサルバドル人はホンジュラス人をどう思っていたのかについても考えてみたい。A神父の話に従えばエルサルバドルではエルサルバドル政府のプロパガンダで反ホンジュラス感情が広がっていたということになる。国境付近に住むA神父は、エルサルバドル軍が村にやってきている間も逃げずに、女性や子ども、

高齢者と教会に残って彼らを守り、兵士たちと向き合うことになったが、A神父は兵士たちによって常に死の恐怖に曝され、暴力的な言葉をかけられたと記憶している。またリーチョさんによるとホンジュラスの村が略奪された時、兵士と一緒にエルサルバドル市民も一緒に来ていたと言っている。そのエルサルバドル市民とはリーチョさんと交流のあった村の人たちと同じかは定かではないが、エルサルバドル市民も何らかの形で政府と関係があったということを示しているのではないか。このようにホンジュラス人と敵対するエルサルバドル人という場面がある一方で、リーチョさんはその時自分の命を救ってくれたエルサルバドル人についても話してくれている。エルサルバドルの侵攻の際、それまで交流のあったエルサルバドルの商人2人がやって来てリーチョさんに危害を加えないようにというエルサルバドル軍宛ての書類を用意したのだ。またA神父はやって来たエルサルバドル兵士に村に住むエルサルバドル人と話せば彼らがホンジュラスで穏やかに暮らしていることがわかったと話して聞かせている。リーチョさん、エスペランサさんは国境付近では人々は兄弟のように暮らし自由に行き来していたといい、通貨もエルサルバドルのものを使うこともあったと言っている。ロサさんは、インタビューを行なった相手が、ホンジュラスよりもエルサルバドルの歴史をよく知っていたと書いている。エルサルバドル側でも地域によっては両者の関係が違ったということは予想できる。狐崎は80年代のアメリカの中米政策がうまくいかなかったのは、「ホンジュラスのナショナリズムに深く根を下ろした反エルサルバドルの感情と国境の3分の1が未確定のまま残る二カ国間の特殊事情を考慮せずに、アルバレスとともに強

引な政策をとった点が、ホンジュラスの軍部と社会勢力をナショナリズムを触媒として結合させて、対米関係の質的变化をもたらし、その結果として低水準紛争戦略を崩壊させた最大の要因であると言えよう」(狐崎、1990年、p.245)と述べている。しかしながら、もしそれを政府レベルだけでなく、兵士のレベルにも当てはめようとするのならば、どこまで反感を抱いていたのか、さらなる考察が必要ではないか。

上記のことと関連しての疑問であるが、ホンジュラス人は、エルサルバドル政府とエルサルバドル人を区別するという点についてはどう考えているのか。私が話を聞いた限りの人は区別しているような話し方をしていた。またトロさんはエルサルバドルに住むエルサルバドル人とホンジュラスに住むエルサルバドル人を区別しているとも言っていた。エルサルバドルは隣国で交流も盛んであるため、政府とその国出身の人は別のものとしてみているようだ。だが、都市部ではエルサルバドル人が経営する店を略奪するなどの行動があることを考えると一概には言えない。他の国を例にとってみるが、例えば、日本や中国など距離的に遠く、自分たちとはかけ離れた生活をしているとみなす人たちには、国へのイメージとその国から来た個人を同一視する傾向が強い。中国製品の質が悪くホンジュラスで多く出回っているという理由から、中国出身の人のイメージが悪くなっていることは否定できない。また話題の1つとして言っているのでもあるが、一部のホンジュラス人は出会った日本人に、日本製品は優れている、敗戦後発展に成功した日本を尊敬する、ワールド・カップで日本を応援したと言って、出会った日本出身の人を誉めようとしたり、自分が相手に好意を抱いているということを伝えようとした

りする。また日本人はみな礼儀正しい、頭がいいと言ってその国出身の人をひとくりにみるところもある。本論自体、「ホンジュラス人は」というような一般化の方向に働きうる問題を立てているので、矛盾する面もあるが、日本と同様、全体のイメージ像で個々のものを語る傾向が強いように思う⁶⁾。

ここでの結論はないが、国を単位としてイメージを語るとき、政治関係だけではなく、経済関係、メディアの報道、普段からの交流など複数の要素が絡み合っていてその間を時と場合によって揺れていることを指摘しておきたい。経済面について述べておくと、当時のエルサルバドルとホンジュラスの関係は、農業面ではホンジュラスが優位で、工業面ではエルサルバドルが優位だったということになる。しかしホンジュラスにとっても工業化は望むところで、頼みの農業もエルサルバドル人に奪われていると考えられていた。しかしどれほどホンジュラスに住むエルサルバドル人がホンジュラスにとって負担だったのかは定かではない。戦争が起き、エルサルバドル人が実際に追放されるとホンジュラスの翌年の農業生産量は下がったとマイナスの効果を話す人もいる。ホンジュラス政府が、エルサルバドル人の土地を分割することを決めたのは、アメリカ企業の土地を分割する代替手段で、そのからくりを秘密にするために政府がエルサルバドル人に原因があるというプロパガンダを行なった可能性もある。

現在も経済状態においては、エルサルバドルがホンジュラスよりも豊かである。

10. 「アメリカ合衆国」への意識

では「アメリカ合衆国」に対するイメージはどのようなものか。1969年の戦争では、アメリ

カが実質的に権力を握るとされる米州機構が介入している。ホンジュラスを含めてラテンアメリカの政治経済にアメリカ政府が関係しないことはない、強く批判する人たちは多い。1969年の戦争でもエスペランサさんはアメリカが武器を売るために戦争を仕組んだと考えたと話してくれた。ホルヘさんはアメリカが両国に武器を提供していたと指摘している。エルサルバドル軍は常に最新鋭の武器を持っていたとされるが、その購入先はアメリカである可能性は高く⁷⁾、またウゴさん、エスペランサさんのお連れ合いさんはホンジュラス空軍が優れていたのはアメリカがホンジュラスにより戦闘機を売っていたからだと言っている。A神父は、この戦争は寡頭支配層が起こしたが、すべてアメリカが操作していたと述べ、自分はその証拠を持っていると話してくれた。

しかし、あまり具体的な情報や証拠がない中で、アメリカの力が働いているとされることがあるのではないかともしえる。戦争の終わり方についてウゴさんはホンジュラスに有利な形で終わったといい、その理由は、アメリカは資源の多いホンジュラスに常に利益を見出していたからだという。他方、A神父は、アメリカはエルサルバドルにすべて都合のよい形で決着させたと言っている。A神父の話の仕方にも注目したい。A神父はアメリカが操作したという証拠があると言ったあと、米州機構がエルサルバドルよりの判断をしたと言い、そこに問題を説明する鍵があると主張した。そして現在のアメリカの石油ビジネスがいかにホンジュラス政府に圧力をかけているかを話してくれた。問題を説明する鍵が何かを言わず、なぜこのような会話の流れになったのかは、私とは初対面でもあり、その証拠を話すことが憚れたのかもしれ

ないし、現在のアメリカの巨大な力からアメリカの責任を想定することが必要だという意味かもしれないが、真意はわからない。またA神父は米州機構がエルサルバドル軍にホンジュラスからの撤退を命じたにもかかわらず、停戦後も1ヶ月以上占領を続け、このことに対して米州機構は命令を実行するようにという圧力をかけなかったことにも触れている。

アメリカにとってこの戦争のメリットは何だったのか、それぞれの国にどのような利益を見出していたのかを考える必要がある。まずなぜ「サッカー戦争」という名がつけられたのか。エルサルバドルのプロパガンダというだけではなく、国際報道がその名を採用した経緯について知らなければならない。ベセッラはアメリカのある報道局が特にその名に帰したとしているが (Longino Becerra, 1982, p. 182)、それは政治的な意図があったのか、それともワイドショー的な報道のためなのか。さらなる疑問として、武器を売り続けるために戦争を起こしたとするのなら、なぜ4日で戦争を停止させたのか。別の可能性を考えると、戦争を引き起こしたのはアメリカではないが、起こってしまった戦争を上手に利用し武器を売って儲け、仲裁して自らの影響力を強めようとしたということはある。アメリカにとってはこの地域が安定化していることの方が都合いい。狐崎によると、実際、1963年にアメリカも関係して中米各国が協力することを目的に中米防衛理事会 (CONDECA) が結成されている。アメリカはこの組織に「CIA要員や軍事顧問を派遣して、反乱鎮圧のための軍事訓練の実施や情報提供などを行い、米国の直接介入の必要なしに国益を防衛するとともに寡頭支配体制を維持擁護する」(狐崎、1990年、p. 212) という利益を見出していた。研究者の中

には、中米の歴史をすべて東西関係で説明する傾向も多いが、南北問題、国内の格差あるいは国際的な貧富の差にも注目し、両方の視点が必要であると指摘する人もいる。何でも「アメリカ陰謀論」的に議論を片付けるのは危険である。またアメリカの思惑と言っても、複数の利害を持っていたことを考慮することも忘れてはならない。アメリカは寡頭政権と組みながらホンジュラスに持つプランテーションを分割させないようにしたということと、一方で80年代にはホンジュラスを「反共の砦」とするために、民政移管して表面上の正当性を保たせようともしている。

現在のアメリカの「援助」についてであるが、これは肯定的な人と否定的な人に別れる。モヤさんはホンジュラスが発展するにはアメリカの援助が必要で、実際にアメリカは現在多くの援助を行っており、またアメリカ企業のような牽引力が必要と考える。ウゴさんは援助しているというがそれは微々たるものでそれ以上にホンジュラスから奪い取っているものが多いと考える。ちなみにアメリカで作られた文化に対するイメージは肯定的あるいは憧れである。そのようなイメージから援助に対しても多数派はよい評価を下していると想像できる⁸⁾。

11. ラテンアメリカの左翼政権について

アメリカという大きな力がある一方で、現在ラテンアメリカでは左翼政権が誕生し、アメリカのやり方と対抗する姿勢を強めている。その急先鋒はベネズエラの元軍人で大統領のウゴ・チャベス (Hugo Chavez) である。他にも彼が信奉するキューバのフィデル・カストロ (Fidel Castro)、ボリビアの先住民の大統領であるエボ・モラーレス (Evo Morales)、それからブラ

ジルの大統領ルーラ・ダ・シルバ (Luis Inacio Lula da Silva) などがいる。このような勢力に対してはどう評価しているのだろうか。これもアメリカの時と同様に、肯定派と批判派に分かれる。しかしアメリカの力に批判的な人たちが必ずしもラテンアメリカの左翼政権に肯定的であるとは限らない。モヤさん、エスペランサさんはアメリカの力に対して違う立場だが、チャベス、カストロ、モラーレスについては自由を奪うことになる否定的である。モヤさんは「民主主義」ということを強調し、ウゴさんと同様にチャベス大統領を狂っている (loco)、いかれている、頭がおかしいという言葉で表現していた。一方で、ホルヘさん、A神父はそのような勢力が拡大していることを肯定的に捉えている。ホルヘさんははっきりとホンジュラスもそうなるほしいと述べ、A神父はそうは述べなかったものの彼らの勢力がホンジュラスにも拡大していることをよい傾向とみなしている。

ラテンアメリカの左翼政権に批判的な人は一時的なものにすぎない、この熱もすぐに収まると判断し、肯定的な人は今後、勢力がさらに拡大するとみなしていた。A神父はラテンアメリカがここ5年から10年で大きく変わるだろうと見通していた。評価と判断がつながっている。

12. ホンジュラスに必要なもの

このような歴史を持ち、ホンジュラスを取り囲む環境への様々な評価があるが、貧困があり犯罪の増加する今のホンジュラスに必要なものは何であるとホンジュラスの人々は考えているのか。これは大まかに3種類に分けられる。1つは、教育である。ここには国民を教育という外からの力で強制しなければならないというある種悲観的な見方と、それぞれの可能性を引き

出すという肯定的な見方がある。前者と思われるウゴさん、モヤさんは職業訓練の機会をつくる、貯蓄を習慣にする、腐敗を改善することなどを挙げていた。後者と思われるA神父、エスペランサさん、ホルヘさんは貧しい暮らしをする人と働くなど実践で表している人たちだといえる。2つとして、外国からの働きかけが必要であるとする見方である。モヤさんは腐敗をなくするために外国から圧力をかけてほしいと答えていた。援助金が無駄遣いされているのを黙認せずに、教育に用いるように移行させれば汚職を和らげることになると考えている。新聞を読めば外国との援助協定を結んだという記事を目にし、町中でもNGOの看板を見かけ、外国からの支援を受けているという話もよく聞かすが、援助が近い存在になっているのではないかと。3つとしてホンジュラスにおける国際関係を変える必要性についても問題にされている。A神父はアメリカから石油を買い続けるままではアメリカのいいなりでホンジュラスは発展できないと考える。そのような環境ではいくら人間が素晴らしい可能性をもっているでも開花することはできないとするからだ。

このように3種類を想定してみたが、悲観的な教育論と外国からの援助という考えについてさらに考察してみたい。ホンジュラスはナショナリスト的な要素があると述べたが一方で自国に対して悲観的な見方をする人もいる。たとえばモヤさんは、自分たちは第三世界の人間だと言い、ホンジュラスのアメリカ企業がホンジュラス企業になることを願うかという質問には、そうなることを望むが、まず初めに自分たちを教育しなければならないと答えた。問題を認識しながらも発展に力を注ぎたいという意味もあるが、それが時には外からの力を期待、過大評

価し、あるいは将来はホンジュラスという貧しく成功には限界のある国を出て外国に移り住みたいという意見にもなる。ホンジュラスのことを卑下して話す人もいる。そのようなナショナリスト的な要素と外国志向の要素が1人の人間の中に共存することもある。

またこの3種類とは別に、ホンジュラスの国民性のようなものにホンジュラスならではの問題があるという見方をする人もいる。グアテマラやエルサルバドルに滞在経験のあるホルヘさんは、ホンジュラス人は内気あるいは臆病である部分があり、隣国で80年代左翼運動が活発になった時もホンジュラスではそうはならなかったが、それもこのことが理由の1つだと考えていた。逆にA神父は、1975年ごろはホンジュラス人の政治意識は高く、社会運動も活発だったと述べている。それも軍事政権の力や選挙で弱体化していくことになったと説明しているが、ホルヘさんの議論に別の視点を取り入れるものである。

このようにそれぞれの人がホンジュラスに必要なものを語ってくれたが、それを一歩進めた先の理想について語るのには積極的な人と消極的な人がいた。エスペランサさんはイスラエルのキブツの生活を理想として語り、ホルヘさんは期待するホンジュラスの将来像を話し、また革命を考え、チェ・ゲバラやマルクスがお気に入りの思想だと答えてくれた。これとは違ってモヤさんは過去の例を取り出して日本も戦後アメリカの支援があったから再興したようにホンジュラスにもアメリカの力が必要だと述べ、1969年の当時、自分が大統領だったらどうしていただろうかという質問には戦争は必要に迫られて起きたのだからどうすることもできないと答えた。

13. それぞれが話してくれたこと

それぞれの人に話を聞いていくと、1つの名前を付けられた出来事に多様な関わり、考えがあることに気づかされる。

その話しの始め方も様々である。当時の政治状況から話し始める人もいれば、自分個人の歴史として話し始める人もいる。その当時のことを、何をどの部分から話し始めたらいいのかわからないという戸惑いもあるだろう。A神父に、今のような考えをどのようにして持つようになったのかと尋ねると、知っている情報の断片を後からつなぎ合わせたと答え、そして当時の人々にとっては、起きていることはあまりに大きすぎて考え、想像することはできなかったと話してくれた。

個人の体験はその個人にとって生きてきたそのものである。しかし、それだけでは戦争全体を語ったことにはならない。そのためA神父は自分が村でどれだけ恐ろしい目にあったとしても、国際関係や政治の問題、戦争の原因の話から始める。それを言うことなしには、いくら村での出来事がセンセーショナルで聞き手に衝撃を与えるものだったとしても話をしたことにはならない。いくつもの生活を壊した暴力的な力について言及しなければ、その出来事について述べたことにはならない。原因を追究しなければならぬという憤りがある。怒りや不満がある。しかし一方で原因が何であれ出来事は個人の上に降りかかり、それは原因に関係なく記憶される。リーチョさんは彼個人の歴史として話してくれた。たとえホンジュラスに利があったとしても、アメリカが裏で操っていたとしても、自分の身に襲いかかってきた出来事に変わりはなく、後戻りできず、それを受け止めることもできない。自分の人生を変えたあまりに大き

な出来事を自分の見た形で語ってくれた。A神父、リーチョさん、2人はともに人の死を目の当たりにしてきた。語り始めは違う。しかしそこには納得できない思い、もどかしい、一方的な理不尽な力に対する感覚がある。

話を聞きたいという私に出会ったときの反応もそれぞれ違った。モヤさんやトロさんは積極的に話したいという姿勢をみせてくれた。ホルヘさんのお祖母さんは何度か途中で笑いながら話してくれた。リーチョさんはモノローグのように語り始め、途中辛い出来事を悲しく笑いながら振り返り、最後には涙を流していた。市場の女性はなぜこのようなことが知りたいのか、なぜ自分に聞きたいのかと不思議そうな様子だった。A神父は初対面の私を優しく笑顔で迎えてくれたが、1969年の戦争について話を聞きたいというと、真剣な表情でなぜ知りたいのかと質問した。何も知らない外国人が自分の人生を揺るがした出来事にいきなり踏み入ってくるということへの反感、警戒心もあるだろう。

市場の女性は今ではほとんど戦争について話さないと聞いた。エスペランサさんはたまに思い出したとき以外は友人とはほとんど話さないが、家族や幼稚園の子どもたちにはエルサルバドルの人を憎まないように話すそうだ。リーチョさんはエルサルバドルの友人と共に当時のことを思い出し、子や孫にも話すと言う。トロさんは何度も言論と思想の自由ということを繰り返しながら私に話してくれた。A神父は今でも自分が本当のことをいうと、かつての軍の責任者の息子などが親族に危害を加えるなど妨害しようとすると言い、そのため自由に発言できないと言う。

個人によってその体験の位置づけは違う。岡真理は日本を例にとって次のようなことを言っ

ている。高度経済成長期の時代に街角で傷痍兵を見たときの記憶から、彼らが「戦争など、実は決して終わってはいないことを、私たちが生きている<現実>が実は虚偽の物語であることを、訴えているのではないか。街角で、はからずも出会ってしまう傷痍兵は、すでに別の物語を生きている者に、完結したはずの物語はいつこうに終わってはいないことを、出来事がなお現在形で続いていることを突きつけ」と述べている(岡、2000年、p.60)。そして戦争中の苦労を時に笑いながら話せる母と祖母には、傷痍兵が戦争でのことを引きずっているように思えて、彼らを批判することになるのだと言う。

笑いながら話せる人、涙を流しながら話す人、今は戦争のことをもう話さない人、今も話すことに苦しむ人たちがいる。岡真理はいまだ終わらない物語を生きているものたちとは何者かを問うている。そして岡真理のあえて問いかけない、物語は完結したと考えている人たちとは何者だろうか。なぜ語らないでいられるのか、このことも問うことができるのではないか。

14. 語りえぬ記憶

オコテベケ出身のリーチョさんの話を聞いたとウゴさんに話すと、インタビューはどうであったかと尋ねられた。彼が話の中で何度も「私はとても苦しんだ」と言っていたことが印象的だったため、初めに彼はとても苦しんだと言い、話してくれたことを要約した。ウゴさんも「苦しんだ」という言葉に反応し、よい話を聞いたねというように一瞬喜んだ顔をした。この会話をした後、私の中に嫌悪感が残った。この感覚は何か。

「苦しんだ」などという言葉、素朴ないかにも個人の体験談のようだと満足してしまいが

ちだ。しかしその一方でそのような言葉だけでは表しきれないものがあるのも事実だ。「苦しんだ」というのは現在から過去を振り返って形容したものだ。戦争が起きている最中は、どう感じるという以上に自分の生活と一体となり離れないもの、逃れられないものになるのではないだろうか。岡真理はこうも言っている。「当事者であるがゆえに、〈出来事〉の唯一無比の証人であるがゆえに、陳腐な紋切り型でしか語り得ないのではないか。そして、私たちは、言葉が媒介する意味を見るのではなく、言葉のズレ、〈出来事〉とそれを表すために語られた言葉のあいだの果てしない乖離、断絶をこそ見るべきではないか。その言葉は、〈出来事〉を意味しているのではなく、〈出来事〉との断絶を、その断絶のうちに現れている〈出来事〉の、他者には想像不可能な暴力の深さを指し示しているのではないだろうか」(岡、2000年、p.35)。「思い出を語る人の語りには、不安がある。自分にとってリアルな出来事が言葉で説明されるとき、果たして他者にもリアルなものとして伝わっているのだろうか、自分の出来事は、出来事のリアリティーを相手に伝えているだろうか、自分の言葉は出来事を十分、語っているだろうか、そのような根本的な不安を抱えている…」(岡、2000年、p.65)。聞き手はどうあっても他者であり、話し手には不安が存在する。しかし記憶は語られることで継承されていくしかない。そのため、話し手は、苦痛を感じながらも、話そうとすることがある。そして今度は聞き手がその聞いた出来事を表現しようとするようになるが、そのとき聞き手は話し手の言葉のある基準、例えばインパクトがあるかどうかなどで選択する。そして選んだ話し手の言葉を本人であるかのように繰り返すことになってしまう。

そこでの暴力性を岡は「苦痛を伴わない証言では〈真実〉が十全に語られていないと、信じていることになりはしないだろうか」と問いかけ、これを「拷問の論理」と呼んでいる(岡、2000年、p.32)。

記憶の政治学……人々に記憶され、外に浮かび上がってくるものによって「現実」と称されるものが語られる。しかしそれですべてだろうか。岡真理や高橋哲也も述べているような「語りえぬ記憶」というものが存在する。

戦争の現実とは何か。私が1969年の勉強をしているということ、人は私に退役兵の話聞くようにと言ひ、軍の展開の仕方や戦争の原因を話し、戦闘が行なわれた村にいた人たちと話を聞くように勧めてくれる。しかしそれだけが出来事の「本質」だろうか。岡は「参照すべき本物、現実が存在しなくても、表象を「リアルな」再現と感じるのはなぜなのだろう」(岡、2000年、p.25)と問い、「出来事の現実<リアリティー>とは、まさにリアルに再現される〈現実〉からこぼれおちるところにあるのではないか」(岡、2000年、p.27)と言う。ここにはリーチョさんの語りえぬ記憶が存在する。高橋はこのように語りえぬ記憶を語ることの困難性に触れつつ、「「物語りえぬもの」を物語りたいという欲求も存在する」(高橋、2002年、p.72)と言っている。

しかしそのような欲求さえ存在しない物語もあるのではないか。物語ることを忘れてしまったこと、語らないでもいられること、これにも同じ様に目を向けなければならないのではないだろうか。市場の女性は当時のことを思い出すのに時間がかかる、今ではほとんど思いださないと話してくれた。それは彼女自身の戦争体験、戦争の記憶の扱い方の問題だけではないだろう。彼女に違和感や疑問、あるいはナショナル

な感覚を噴出させないでいられるものとは何なのか。言葉や記憶の表象だけでは零れ落ちるものがあまりに多すぎる。岡は、「記憶」というものがときに「私」の意志とは無関係に、わたしにやって来る。ここでは、「記憶」こそが主体である。そして、「記憶」のこの突然の到来に対して、「私」は徹底的に無力であり、受動的である。言いかえれば、「記憶」とは時に、わたしには制御不可能な、わたしの意志とは無関係に、わたしの身に襲い掛かってくる」(岡、2000年、p.5)ものだと述べている。忘れてしまったこと、よく思い出せないことも、これらは自らが積極的に取捨選択した結果ではないのかもしれない。

15. 物語の複数性と出来事の唯一性、そして分有

1つの出来事に対する語りは複数存在するが、その出来事を生きる人にとっては、それは唯一のものである。しかし、同時にその出来事、物語の記憶を他者と分有しようという力も働く。岡真理と高橋哲也は、歴史とは客観的な事実ではなく、人間によって語られるいくつもの物語として論じている。実際の社会ではこれらの物語は抗争している。高橋は、「複数の異なる物語が対立、抗争の関係にある場合、ある物語を採って別の物語を斥けようとするならば、当然ながら、「歴史は物語である」というだけでは済まず、物語の具体的内容に入って、それが、どのように「排除と選別の暴力」を行使しているかを明らかにする必要があると考える。そして同時に、「倫理的」な判断にコミットする必要がある」(高橋、2001年、p.48)と言っている。A神父の国家は国民の生活のために働いたりしなかったという物語、リーチョさんの自分は苦しみすべてを失ったという物語、モヤさんの戦争は農民の生活改善を求める欲求から必要に迫

られて起きたという物語、これらは共存しうるだろうか。それともこれらはそもそも対立するものなのだろうか。同じ社会の中に囚われた物語ではないだろうか。表面上に語られている言葉だけでは判断は下せない。その記憶、語りをどのようにみることが求められている。

高橋の言う「判断」を下す時に、関係してくるのが、ナショナリズムと自己を正当化したいという願望の存在だ。岡は、日本のことについて「今、この国で生起している事態は、ナショナルな自己肯定の欲に貫かれていると思う」(岡、2000年、P.67)と論じている。「その戦争で不条理な死を被った者たち、戦争という〈出来事〉の暴力を現在の物語として生きざるを得ない他者の存在を想起する契機を欠落させ、自らの被害だけを記憶し、想起しているという点において…(中略)…戦後のこの社会のナショナルな経験それ自体を反復しており、他者の否認というナショナルな欲望、そしてナショナリズムそれ自体を分有しているのである」(岡、2000年、p.74)と言っている。ホンジュラスのことを考える際もこのナショナリズムの問題は見逃せないだろう。しかし日本のそれとの違いにも配慮しなければならない。ホンジュラスの場合、自己肯定欲だけに留まらない、閉ざされていない何かがあるように思われる。

岡真理は出来事の唯一性について述べている。「『ホロコースト』という〈出来事〉の唯一性を、〈出来事〉というものの本質的な唯一無比性、単独性と同時に語ること、語りうるような思考の地平を見出すこと、それは、私たちが歴史修正主義の言説に抵抗していくための緊急の課題のひとつであるとわたしは思う」(岡、2000年、p.vii)。例えば他者がアウシュビッツの出来事と南京大虐殺の出来事を比較すること

で、南京大虐殺はアウシュビッツよりも酷くなかったとし、南京大虐殺という出来事に生きる人の記憶を忘却することになる。岡は、このような働きを、記憶を他者と分かち合う前にそれを消去しようとする暴力だとして批判する。

今回、聞きとりをしていく中で、戦争の当事者である彼ら自身から、他の出来事を結びつけて語ろうとすることがあった。リーチョさんは自らすすんで、自分の体験した戦争はひとつの例で、世界にはいくつもの戦争があり、おそらく真似をしていると話し、A神父はラテンアメリカで広く起きている出来事だと言った。彼らのしていることは唯一性を否定しているわけではないし、比較しているわけではない。彼らにとってその出来事が唯一であることには変わりはない。しかし、自分の記憶の中だけに納まっているわけではない。それが岡の言う他者との記憶の分有の試みなのだろうか。語ることに抵抗がある一方で、今もある怒り、これ以上このようなことが起きてほしくないという願いを外に向けて発信したいという思いを感じる。記憶を分有せねばならぬという力に、自分だけの辛い体験をこじ開けて、外の世界とつながろうとする。「他者」はそれにどう答えるのか。

おわりに

ここで一旦筆を置くにあたって、ただあまりにたくさんの語られたもの、語りえぬものに呆然とし、まだ出会っていない語りに静かに立ち止まりたいと思う。

出会った人たちのことを思い出すと、感謝という言葉では表しきれない、心にずしりとくるこの重みを感じる。浅学の私に貴重な助言をくださった石井章先生、田中高先生、そして調査前から多大なご支援をいただいた小島亮先生に

は尊敬と特別の謝意を表したい。

注釈

- 1) ここでは個人的に佐藤郁也『暴走族のエスノグラフィー モードの叛乱と文化の呪縛』(新曜社、1984年)のドラマ化の分析を意識している。暴走族の若者たちが彼らの物語をどう構成しているのか「インチキ」も含めて分析しているからだ。
- 2) 政府がこの社会運動の高まりによって人々の声に答え、運動を抑える必要があったのは、当時の国際情勢も関係しているといえる。1959年にキューバ革命が起これ、中米の国々は危機感を強めていたのだ。グアテマラでは左派のゲリラと軍が戦い、ニカラグアでは独裁制をしくソモサに対抗する動きが出て来ため、ホンジュラスとニカラグアは、左派の動きを封じ込め、農民がそのような勢力の影響下に曝されないようにしたのだ。(ICE Case Studies) <http://www.american.edu/ted/ice/soccer.htm>
- 3) この1969年の戦争が80年代のエルサルバドルの内戦の要因にもなっている。ホンジュラスから送還されたエルサルバドルの農民がエルサルバドル国内での圧力を強め、また軍部再建のための費用が経済の悪化をもたらしたからだ。http://militaryhistory.suite101.com/article.cfm/the_soccer_war_of_1969
さらに、1980年の和平合意で国境画定のための交渉を継続することに合意し、1986年には問題となっていた210マイルのうちの3分の2は決着がついたものの、残りの3分の1は合意できなかったため国際司法裁判所へ持ち越された。エルサルバドルのゲリラ組織FMLNはその地域を自分たちの基地として残して置きたいために解決の妨害を図った。エルサルバドルで内戦が終結した同じ頃の1992年、国境問題は一応の決着をみる。
<http://www.american.edu/ted/ice/soccer.htm>
しかし実際の作業は難航し、最終的な決着は2006年まで持ち越される。<http://ja.wikipedia.org/wiki>
- 4) 自叙伝LAS HISTORIAS DE UNA ROSAの記述によれば、彼は戦争当時22歳、現在59歳。サン・ペドロ・スラに住む作家である。2005年に1969年の戦争に参加した兵士やオコテペケ(Ocotepeque)の国境付近の村に住んでいた人々へのインタビューを行った。

- 5) オリガーキーあるいは寡頭制とは、この時代のホンジュラスでは政府、軍部、資本家を指すのが慣用である。ホンジュラスは歴史的に2大政党制をとるがクーデターで軍事政権が何度も樹立されている。資本家はアメリカ資本と結びついている、あるいはアメリカ資本そのもののこともある。エルサルバドルのそれは、いわゆる14家族と呼ばれる富裕層と軍部派閥型政権のことで、前者は農業、金融、軽工業を支配し、政治的影響力を握っていたとされる(田中高、2004年、pp.46-48)。オリガーキーはホンジュラスよりもエルサルバドルの方が強力で、より少数の人たちが富を独占していたというのが一般的な見解だ。
- 6) ここで聞き取りの際のバイアスについて若干、触れておきたい。好井裕明は問題提起的な論考「調査するわたし」というテーマ(好井裕明、三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』世界思想社、2004年所収)の中で、「カテゴリー化」の問題について論じている。好井は調査する「私」が「相手」を理解しようとする際、「相手」の言うことをある場所に位置づけ、分類し、標準化するつまり「カテゴリー化する」というプロセスを描いている。好井は相手がこれに反感を持って反応することで論じるべき問題が明らかになることもあると述べているが、山室敦嗣は「フィールドワークが〈実践的〉であるために」(好井、三浦編前掲書所収)で、カテゴリーを固定化してもその内容は多様で質的に同一でないこと、またカテゴリー化によって提起されるべき問題を見逃してしまうこともあると指摘している。例えばここでは人を国籍、居住地という単位で対象と捉えていること、また国を好きか嫌いかと問うことなどが当てはまるだろう。また足立重和が述べている「常識知」の問題も一考に値する。「常識知」とは、地元の人たちは当たり前だとしている認識のことである。この常識知はカテゴリー化され地元の人たちにとっては当たり前のため、あえて語るに値しないと考えられている。例えば、内容に直接関係するわけではないが、ホンジュラスでは表現豊かに、あるいは大げさに話すということがよく行なわれる。そのため中国人への反感や日本人への賞賛、エルサルバドル人への好意などが実生活で感じている以上に相手に伝えられることがある。それは地元の人であれば、社会生活を共有しているため、あるいは話し方に

慣れているためどこまでが真意かをある程度推し量ることができるが、地元の人間でないものには判断がつきにくい。

- 7) エルサルバドル軍は空軍が敗退していくのを受けて、私的なルートでアメリカから戦闘機を買いつけ、密輸入したが、実際の戦闘には間に合わなかったという記事もある。http://militaryhistory.suite101.com/article.cfm/the_1969_soccer_war_in_the_air
- 8) アメリカの支配力について言及されることは多いが、ラテンアメリカではスペインが征服を行なったという出来事も忘れてはならないだろう。ホンジュラスでは、スペインという国は同じスペイン語ということで親近感も湧きつつアメリカ同様憧れの存在である。ウゴさんもその一人であるが、スペインが現在行なっているラテンアメリカ諸国への援助は、昔彼らが奪った物を返しているだけだと鋭い指摘も行なっている。実際、スペインがホンジュラスとエルサルバドルの国境を定めて分割して統治を始めた時以来、エルサルバドルは土地不足に悩まされることになったからだ。
<http://www.american.edu/ted/ice/soccer.htm>

参考文献

- リシャルト・カプチンスキ、北村美和子訳、『サッカー戦争』、中央公論社、1993年、(日本語訳は英訳から重訳されたが、本書の原版はポーランド語で、Wojna futbolowa Warszawa, "Czytelnik", 1978, である)
- 狐崎知己、「米国の対中米政策」加茂雄三編、『転換期の中米地域』、大村書店、1990年
- 田中高編、『エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグアを知るための45章』、明石書店、2004年
- James A. Morris, (1984), HONDURAS: Caudillo Politics and Military Rulers, Westview Press
- Rosa Amelia Morales, 'capitulo5 NACE MI HIJA EN UN MOMENTO CONFLICTIVO' LAS HISTORIAS DE UNA ROSA, editorial RAM, 2006, pp.53-68
- Longino Becerra, '10. Guerra Honduras-El Salvador' evolucion historica de Honduras,

BAKTUN editorial,1982

付記 1969年の戦争の文献について

ホンジュラスで名前を知ることのできた1969年の戦争の文献について記しておきたい。網羅的ではないことを初めに断っておく。

以下は古い文献、雑誌の論文である

OBDULIO NUNFIO, 'Radiografia de la Guerra de futbol o de las cien horas', Tomado de Revista Mexico de Sociologia, ano XXX 19?? no.3 May-Ju?-,

James Rowles, editorial universitaria centroamerica (EDUCA), El Conflicto Honduras-EL Salvador y el orden juridico internacional (1969),

Eddy E. Jimenez, Mencion Ensayo La Guerra no fue de futbol, coleccion premio casa de las Americas 1974,

以下は比較的新しい資料である。

Longino Becerra, (1982), '10. Guerra Honduras-El Salvador' evolucion historica de Honduras, BAKTUN editorial

(ホンジュラスで出版されたホンジュラス史の本である)

Elizabeth Fonseca, (1996) 'La Guerra de Futbol', Centro America: Su Historia, 1996,p.251

(コスタリカで出版されたものである)

VETERANOS DE GUERRA, (2000), Revista de los Combatientes,no.1 julio

(1969年の戦争の退役兵の会の雑誌、当時の指令官が死去したことによる戦争の特集が組まれている)

Enciclopedia de Honduras, (2001), OCEANO

(スペインの出版社から出されたホンジュラスについての辞典に記述がある。地図はevolucion historica de Hondurasと同じものを使っている)

Elvir Sierra, Cesar. ,(2002),EL SALVADOR-ESTADOS UNIDOS-HONDURAS: LA GRAN CONSPIRACION DEL GOBIERNO SALVADORENO PARA LA GUERRA DE 1969: LA HISTORIA MILITAR Y

DIPLOMATICA DE LAGUERRA DE LAS 100 HORAS DE 1969. Tegucigalpa: Litografia Lopez

(著者は元軍人である)

Rosa Amelia Morales,(2006) 'capitulo5 NACE MI HIJA EN UN MOMENTO CONFLICTIVO' LAS HISTORIAS DE UNA ROSA, editorial RAM, pp.53-68

(先に述べたホンジュラス人の女性の自叙伝に彼女の体験とインタビューによる当時の様子が書かれている)

ホームページ情報

ICEのケーススタディー

<http://www.american.edu/ted/ice/soccer.htm>

Wikipwdia

http://en.wikipedia.org/wiki/Football_War

On War.com

<http://www.onwar.com/aced/data/sierra/soccer1969.htm>

話をしてくれた人たち…

リーチョさん



ホルヘさん



ウゴさん



エスペランサさん



市場の女性



トロさん



モヤさん



上3枚：サンタ・ロサで爆弾の落とされた場所。
上がダム付近、中が空き地、下が小学校と発電所付近。



サン・ラファエル・デ・ラス・マターラスで戦死した兵士の名前が刻んであるモニュメント。



上2枚は退役兵の会の雑誌より



下3枚はモヤさんからの提供

